

## ■ 編集だより

## 編集後記

DSM-5 日本語訳が出版され、精神科診断についての関心が高まっている。精神科の研修医になりたてのころ、先輩より『正しいことは患者さんを傷つけることがある』と教わり、自分なりに精神科の診断を患者さんに伝える難しさを感じた。精神的な診断は代えがたい重要性をもつが、良い意味でも好ましくない意味でも様々な方向性をもたらす。医学的診断についても同様であるが、正確な診断が一方で生きるための希望を失わせるものにならないかと思案した。

そのような時、児童用の心理検査 K-ABC 法を開発したアラン・カウフマンの言葉を知った。「知能検査は、子どもの学力を予想し、安楽椅子に座ってその悪い予想（子どもの失敗）が当たるのを待つために実施するのではない。アセスメントで得られた情報（得意な認知スタイルや望ましい学習環境など）を子どもの援助に活かすことで、その予想を覆すためにある」。ここで“検査”を“診断”、“援助”を“治療”に置き換えると「精神科診断は患者さんについての悪い予想（患者さんの失敗）が当たるのを待つために行うのではない。診断を治療に活かすことで悪い予後の予想を覆すためにある」と解釈できるのではと思えた。カウフマンはまた次のようにも述べている。「検査結果を統計だけではなく、日常の観察を研究成果に基づいて解釈し、子どもの援助に結びつけるために用いる。これが『賢いアセスメントモデル』である」ここでも“検査”を“研究”と置き換えると、「研究結果を統計だけではなく、日常診療をエビデンスに基づいて解釈し、患者さんの援助に結びつける」となるだろうか。そう思うと日常診療も日々の研究も少し前を向けるのではと考えられた。

カール・ヤスパースに「大学論」（福井一光訳、理想社）という学問のあり方を論じた著作がある。その中で以下のような記述がある。「精神科学の教養価値は、人間の過去の内容、伝統への関与、人間の可能性の広がりをめぐる知識を通して充実するものです」「私たちの熱望することは、ただ一つのことです。即ち、これらの伝統と前進する研究のために、幸運の中にあっても、あらゆる時の中にあっても、私たちの最も誠実な努力が存在し得ることを確認することの出来る一つの空間が許されることでもあります」やや強引であるが、ヤスパースが論じた大学という空間で表現されたものを学会ないしは学会誌に置き換えて解釈すると、そこでは『幅広い人間理解』を通して『努力の存在が認められる空間を提供すること』が必要と述べているように感じた。

カール・ヤスパースは精神医学の場では『直観的推測』は排し、ひたすら患者の言葉を正確に記述することに徹する立場である記述精神病理学を行ったとされている。本学会誌においては特に症例報告を重視し、原著などの研究論文においても、臨床実践における正確な臨床観察上の記述が求められている。精神科領域でも多くの地道な努力が今日に生かされているが、例えばデイヴィッド・ウェクスラーが35年にもわたり精神科病院で多くの心理検査を実施する中でウェクスラー式検査の開発に至ったが、そのボトムアップ的なアプローチによって得られた知見が後に考えられたトップダウン的な知能理論での説明と矛盾しないことが最近わかってきている。このような例は我々の日常診療での診断や援助で蓄積された経験の集積がより有意義な知見につながる可能性を示しているように思えた。本学会誌がそのような経験値の集積する場とされ、一方で自由で活発な議論の場としても活用されることが大切ではないかと考えられる。「誰もが権威者ではないのです。自主性と自由は巨巖に対して、なお砂粒を持っているものです」（ヤスパース 大学論）

谷井久志